

想起と反復

—あるマプーチェの夢語りの分析—

箭内 匡*

この論文は、チリ南部に住む先住民マプーチェの一人の老人のある語りを通して、今日のマプーチェの人々の存在のあり方を照射しようとするものである。老人はこの語りの中で、マプーチェの信仰に対する疑い、そんな疑いを持っていた頃にみたくわめて印象的な夢（「ヘリコプターの夢」）、そしてその夢の本当の意味を理解するに至った数年前の儀礼での出来事、を回想する。筆者はまず、この語りの部分部分が喚起するイメージの連鎖と、全体の中で反復されるイメージを追ってゆくことにより、この語りが目指しているマプーチェ的な「真実」の全体的な反復を跡付けする。そのあと、そうした反復の試みの中に含まれている差異を引き出して、老人の思考の中の新しいものを表出させる。筆者は、彼の思考の中にみられる、こうした伝統との間の差異と反復の運動を、今日、マプーチェの人々が自らの伝統を生きている姿の一端を示すものとして提出したい。

キーワード：マプーチェ、夢、反復、イメージ

目次

- I. はじめに
- II. 夢＝神話＝儀礼
- III. ヘリコプターの夢
- IV. 時空と反復
- V. 反復と「新しいもの」

というのは、反復は、ギリシア人たちが「想起」と呼んだところのものに対する決定的な表現だからである。
—キルケゴール『反復』—

I. はじめに

南アメリカの多くの先住民社会では、夢が重要な社会的意味をもつと言われる。実際、これ

らの社会の人々はしばしば、人は夢のなかでこそ真実と出会うことができるのだと主張するのだが、こうした見解は人類学者を狼狽させるものである。彼らは何を考えているのだろうか。なぜ、よりもよって夢のような、きわめて不確定で、無意識にどっぷりと浸かった現象に、

* 日本学術振興会特別研究員

彼らは真実を見いだそうとするのか。

この論文は、チリ南部に居住する先住民マプーチェの一老人の、夢を主題とする語りを分析する作業を通じて、マプーチェの人々が今日、夢によって開示される真実をどのように生きているかを照射しようとするものである¹⁾。語り手のセバスティアン老が、ここで「ヘリコプターの夢」と名づけておく夢をみたのは、もう20数年も前のことであった。この夢は彼に強烈な印象を与え、彼はそれを決して忘れることがなかった。それは、マプーチェ的なものの価値が日々軽んぜられてゆく状況の中で、マプーチェの神への信仰を保ってゆくための、彼にとっての唯一の手がかりであったという。そして、夢をみてから20年の後、ある大きな儀礼が行われた場において、彼はこの夢の（彼にとっての）本当の意味をはじめ理解し、深い感動を受けることになる。セバスティアン老は、こうした一連の経験を、ほとんどリアリズムに近いスタイルで語っており、そこには、夢という現象についての彼らの（より正確にいうなら、彼の）思索が、結晶化した形で、そして我々にとっても理解しやすい形であらわれている。この論文の目的は、この語りの分析を通じて、そこに二重の仕方で現れている、今日のマプーチェの人々の存在のあり方そのものを、明るみに出すことである。

南アメリカの先住民社会における夢の研究には、これまでいくつかの例がある。中でもとりわけ重要なのは、W. クラックの、ブラジルのカグァヒヴ(Kagwahiv) 社会に関する一連の仕事である。ここでは、この論文のテーマと特に関連する彼の三つの指摘を拾いながら、この論文の出発点としよう。

まず、クラックは、夢が「語られる」ことの意味について、重要な指摘を行っている。夢をみた人は、他人とそれを共有するために、その夢を語るのであるが、クラックによれば、この語りは一つの決定的な変化をもたらすことにな

る。つまり夢は、そうして言葉の枠をはめられることによって、夢本来の、一つのイメージから別のイメージに絶え間なく移行してゆく、きわめて流動的で豊かな性質を失ってしまう。そして、もとの夢から多くの部分をそぎ落とされ、また時間的に秩序づけられた、凍結した二次的イメージの連鎖がこれにとって代わるのである。この二次的なイメージの連鎖は、夢自体よりもずっと記憶に適したものであり、夢の語り手はそれ以降、基本的にはこれを夢の記憶として保持することになる(KRACKE 1987: 35-6)。後にみるようにマプーチェの人々も、夢は、それを忘れることのないよう必ず語らなければならない、と述べるのであり、このクラックの見解は、マプーチェの人々の考えとも部分的に一致するものである。

第二に、神話が引き起こすイメージに関するクラックの指摘を取りあげよう。彼は、神話の語りは、一般に、聞き手の中に深い感覚的イメージを引き起こすものであり、そして、それらはおそらく語り手の中でも、言葉よりも感覚的イメージとして記憶されているものであると論じている。神話の語り手は、聴衆によって、また自分の気分や意図によって、同じ神話でもかなり違った風に語るものであり、言葉としてはっきり記憶されている部分もちろんあるだろうが、全体としてみるならば、神話はむしろイメージの連鎖として記憶されていると考えるべきなのではないか、と彼は主張するのである(KRACKE 1987: 36-7)。マプーチェの神話的伝承の語りにおいても、ここでクラックが神話について言っていることと同様の特徴が見られ、この点でも、クラックの見解はそのままマプーチェのケースに当てはまるように思われる。

ここから、第三の指摘に移ることができる。クラックによれば、感覚的イメージそのものようにみえる夢と、言葉の連鎖そのものようにみえる神話とは、上の二つの点から明らかのように、語りの際のイメージの喚起というレベルで、きわめて近いところにお互いを見いだす

のである (KRACKE 1987: 37)。次節にみるように、マプーチェの場合も、夢と神話の伝承、それに加えて儀礼が、イメージの喚起というレベルで、相互に深く結びついていると考えられる。この論文が示そうとすることの一つは、夢と神話と儀礼のイメージのレベルでの結びつきが、冒頭で提起した問題、つまり人々がなぜ夢の中に「真実」を見いだすのか、という問題と関わっているということである²⁾。

この論文では、このような立場から、次の順序で議論を進めてゆくことにする。

Ⅱ. では、セバスティアン老の語りを検討するための準備として、まず、マプーチェの民族誌的背景のうち最も基本的ないくつかの事柄を提示する。そのあと、そのような民族誌的脈絡の中で夢がどのような役割を果たしているかを概観する。ここで示しておきたいことは、彼らが「大きな夢」とよぶ種類の夢が、イメージのレベルにおいて、いかに神話や儀礼と深く結びついたものであるか、ということである。そして、節の終わりで、セバスティアン老の語りの背景となっている諸事実を提示する。

Ⅲ. は、セバスティアン老の語りの、枝葉を省いたほぼ全文の紹介である。

Ⅳ. では、この語りが語り手および聞き手の中のどんなイメージと関連しているか、という問題を、時空と反復という二つの角度から検討してゆく。この作業を通じて、セバスティアン老が夢の経験の中に見いだした「真実」がどんなものであるかが、次第に明らかにされてゆくであろう。筆者の理解によれば、それは、ほとんどプラトンに近い意味で、「想起」されるものである。

冒頭に提起した問題は、もし筆者の分析が成功しているならば、このⅣ. で十分答えられていることになるだろう。しかし実は、これは問題の半分でしかないということもできるのである。セバスティアン老の語りは、そのリアリズム的なスタイルを通じて、彼らが夢の中に見い

だす「真実」の意味を、我々に近づきやすい形で提示してくれる。しかし、彼はなぜ、そのような形で自らの経験を語ったのだろうか。あるいは、そのような形で語ることによって、彼は何をなしとげたのであろうか。これが、論文の最後の節であるⅤ. で考えてみようとするテーマである。

Ⅱ. 夢＝神話＝儀礼

マプーチェ (Mapuche) は、チリ南部 (南緯 37～40度) およびアルゼンチンの隣接地域で、小麦やジャガイモの耕作と羊や牛の牧畜を主な生業としながら暮らす人々である。彼らはスペインの植民地時代の間ずっと独立を保っていたが、19世紀、チリとアルゼンチンが独立して近代国家の建設に本格的にのり出す中、しだいに追いつめられてゆき、ついに1880年前後、この両国の軍隊の前に屈服することになった。多くの土地を奪われ、政府が割り当てた居留地の中に追い込まれた彼らは、それまでの独立自尊の地位から、近代国家の中の、貧しく、教育のない、マージナルな集団の地位に一気に転落することになる。今日のマプーチェは、一方で、生き延びてゆくためにチリの文化の様々な物事 (マプーチェの人々のいう、ウィンカ *winka* の物事) を吸収しなければならず、他方で、そうしたウィンカの物事の侵入に対して、同時になんとか心の中で抵抗して、マプーチェである自分たちを守る、という、相矛盾した戦いをつねに強いられている。そのような中で、マプーチェの人々が少しずつチリ人化の方向に追いつめられてきたことは否定できない。それは、今日、最も伝統主義的なマプーチェの人々でさえ、ほとんど例外なく流暢にスペイン語を話し、チリ社会の物事に精通している、という事実によっても明白に示されている³⁾。

しかし、逆境にもめげず、多くの人々が今日までマプーチェの伝統を何とか守ろうとしてきたことも確かである。彼らは、あらゆる非伝統

的なものをウィンカの物事と呼んで、それらをマプーチェ本来の物事からたえず区別することにより、マプーチェ的なものの一定の領域を確保しようとしてきた。この区別は日常生活の中でもしばしば現れるが、それが特に強調されるのは彼らの儀礼体系ニヤトゥン (*ngillatun*) においてであり、とりわけその最大の形態であるカマリクン (*kamarikun*) においてである⁴⁾。カマリクンは、疑いなく、マプーチェの最も重要な儀礼であり、セバスティアン老の語りの中にも登場するので、ここで簡単な説明をしておこう。

カマリクンは、天の神およびそれ以下の一連の霊的存在に対し、雄牛・雄馬・羊・鶏などの供犠を行って、感謝の意を表明する儀礼であり、数ヶ村から千人以上の人々が集まってきて、丸三日間、儀礼場の草原に寝泊まりして行われる⁵⁾。これは、天災などにより臨時に開かれる場合を除けば、せいぜい四年に一度（実際にはもっと年数が経ってしまうことが多い）しか開かれない大行事である。カマリクンの日、草原の中央に作られた祭壇で、祈り手 (*ngempin*) と呼ばれる人が、村の頭 (*longko*) たちとともに、込み入った手順を踏みながら、いけにえの動物や鳥を一つ一つ神に捧げて祈ってゆく。この祈りは、明け方から午後まで延々と続く。その他の人々は、祈り手が祭壇で祈っている間、サルヘント (*sargento*) と呼ばれる指揮官の指示に従いながら、祭壇の回りを反時計回りの方向に走って回ったり、踊って回ったり、また少し遠巻きにして馬に乗って回ったりする（この最後の動作はアウン (*awün*) と呼ばれ、セバスティアン老の夢の中にも登場するものである）。カマリクンは、きわめて豊かな視覚的・聴覚的・運動感覚的なイメージを与える儀礼であり、そこには、マプーチェ的なもののほとんど全てがある。

ところで、マプーチェの人々にとって、夢とはどのような現象なのであろうか。

彼らの説明によれば、人間とは、夢を見たり会話したり祈ったりする魂プジョメン (*püllomeñ*) と、身体的生命を維持する魂エラウメ (*elaume*) という、二種類の魂をもった存在である。人が眠っているとき、エラウメは身体の中に残っているが、プジョメンは外に出かけて行って様々な経験をする。これが夢 (*peuma*) である。プジョメンは、夢の中できわめて活発に活動し、妖術をかけようとする者があればそれを察知するし、天の神が使者を送って人間に何かを伝えようとする場合も、プジョメンが夢の中でその知らせを受け取るのである。この、天の神からの知らせを意味していると思われるような夢は、「大きな夢 (*füta peuma*)」と呼ばれて、決して忘れてはならず、細心の注意を払って扱わなければならない。

さて、夢を見たら、ともかく、誰が相手でもいいから、それを口に出して語らなければならない。そうすれば、どんな夢でも忘れることはない、と彼らは説明する。そんなわけで、彼らの朝食前のひとときは、しばしば、それぞれの夢を語りあう時間となる。このとき、既存の夢解釈のコードに従って若干の夢解きがなされる場合もあるが、一般的傾向としては、彼らは意外なほど夢の最終的意味を性急に求めようとしない。たいてい、夢をみた本人はひたすら語るだけであり、聞き手はそれを聞いて、場合により二、三の質問をするだけである。数人のマプーチェは、夢の意味というものは、分かる 때가来れば自然に分かるものだ、と私に説明した（この論文で取りあげるヘリコプターの夢のケースは、まさにその好例になっている）。だからこそ、その時がくるまで覚えておかなければならないのであり、それは、忘れないために語らなければならない、とする彼らの夢への態度とも一致するものである。マプーチェの中には、自分がかつて見たきわめて多くの夢をはっきり記憶していて、いつでも思い出せると主張する者も少なくない。

とりわけ「大きな夢」のような重要な夢を見

た場合には、その後、本人の中で折りにふれて想起されるほか、身近な人々を聞き手として何度も語られることになる。最初に定着した夢の記憶は、こうしてその後何度か言葉とイメージの間を行き来するうちに、いわば結晶化したものとなってゆくはずである。そして、天の神から受け取ったメッセージであるそれらの夢の記憶は、しだいに、本人にとってのいわば個人的神話とでもいうべき地位を獲得してゆくのである。こうした夢が、本人にとってだけではなく、村全体にとっての関心事と関係があるような場合には、その夢はさらに村の人々によって連鎖的に語られてゆく。このような夢はたいいてい、他の人々にとっても鮮やかなイメージを引き起こしうる印象的なものであり、かなりの早さで村人の全員に共有されていって、いわば状況的神話とでも呼ぶべきものにかかわってゆくのである⁶⁾。ここで神話という言葉を使うのは、必ずしも比喩的な意味においてではない。なぜなら、こうした種類の夢の語りは、それが永続的な重要性をもつものである場合には、世代を越えて語り継がれてゆくのであり、今日のマプーチェたちが語る神話的伝承の中には、教え切れないほどの、彼らの祖先達がみた夢の語りが含まれているのである。一言でいうなら、マプーチェにとって、夢とは、つねに神話的伝承に移り変わってゆく可能性をもったものである。

「大きな夢」についてももう一つ重要なことは、この種類の夢の中には、天の神が何らかの行動をとるよう促している内容のものが少なくないということである。たとえば、あるマプーチェは、ある時、野原で一頭の黄色い雄牛が杭につながれている夢を見た。ただそれだけの夢だが、マプーチェにとってこれは「大きな夢」である。なぜなら、黄色い雄牛とは、大儀礼カマリクンにおける、最も重要ないけにえの動物であるからだ。天の神のメッセージは明白であり、彼はいつの日か、自らの負担で黄色い牛を供儀獣として提供し、人々に呼びかけて、自分が先頭に立ってカマリクンを挙行しなければなら

ないのである。もちろん、これは大きな経済的負担と、村の人々の全面的協力を強いるものであり、そう簡単に実行することはできない。時は経っていったが、彼がこの夢を忘れることはなかった。そして、すべての条件が整った時、とうとう彼はカマリクンを挙行了した。それは夢を見てから16年後であった。

もちろん、このようなケースは、典型的ではあるにしても、そう多く見られるものではない。しかしもっとささやかなレベルでなら、彼らが日常的に実践していることもたくさんある。たとえば、ある婦人はある時、いつも儀礼で使う大事な瓶をなくしてしまった。それから数日後、夢の中に彼女のイトコがあらわれ、これがお前の瓶だ、と彼女に差しだした（しかしそれはなくした瓶ではなかった）。この夢の意味は、彼女にとって必ずしも明解ではなかったが、ともかく天の神がなくなった瓶について何かを知らせてくれようとしていたのだと彼女は考えた。そして、そばにあった小麦粉をかまどの火に投げ入れながら、天の神に向かって祈り始めたのである（小麦粉は煙の形で天の神に届くと考えられている）。このように、マプーチェ的思考においては、夢の中の世界と行為の世界とは深く結びあっており、前者は後者に働きかけて、行為を引き起こす力をもったものなのである⁷⁾。

このように、マプーチェ社会において、夢（とりわけ「大きな夢」）は、神話や儀礼と深く関連し合っている。そのことは他方で、彼らの夢の中に、神話的伝承の登場人物が現れる（あるいは夢解きの段階でそうした存在と結び付けられる）という事実、また儀礼の風景が現れたりする頻度がかかなり高いという事実によっても、証拠立てられているであろう。中でもカマリクンは、きわめて豊かな感覚的イメージを提供するものであり、これに関連する夢は非常に多い⁸⁾。次節の語りの中のでてくるセバスティアン老の「大きな夢」も、この点を例証するものとなっているはずである。

そこで最後に、セバスティアン老の語りの背景となっている諸事実を簡単に述べて、この節を終わることにしよう。

まず、語り手のセバスティアンであるが、彼はカラフケン湖西北のA村に住む75歳前後の老人である⁹⁾。この語りは、1990年10月8日、本人の自宅で、筆者に向かって、マプーチェ語で録音された(録音時間は17分余り)。セバスティアン老は録音の際、このテープを記念に残したいとの要望を筆者に対して述べており、それゆえこの語りには、潜在的には、自分の孫達へのメッセージという意味も込められている。語りは、マプーチェ語でヌツァム (*ngütram*) と呼ばれる伝統的な語りのスタイルで行われており、この手の語りに特徴的なように、興が乗った後は、早口で一息に語られている。

語りの舞台であるA村では、セバスティアン老の遠縁の父方オジにあたるアンブロンソ老が、カマリクンの際の祈り手の役割をつとめている。セバスティアン老は、アンブロンソ老に次ぐ村の第二の長老であり、この二人はA村の頭 (*longko*) と呼ばれて、カマリクン関係の事柄では村のリーダー格である。アンブロンソ老が祈り手なら、セバスティアン老は、カマリクン全体の指揮官であるサルヘント (*sargento*) の役を務める。サルヘントは、人々に命令を与えて全体の進行役をつとめるほかに、不敬な行いをするものがないよう、マカナ (*makana*) と呼ばれる木の棒をもって人々を監視する役目も果たす。語りの中で出てくるように、セバスティアン老は子供の頃、夢の中で、「マカナを手にとせよ」(つまり、サルヘントになれ、ということ)、という神のお告げを受け、後にそれが現実になった。カマリクンの役職につく人が事前にそれを予告するような夢を見たときとされるケースは多く、これもまた、夢から行為への移行の典型的な一形態であるといえる。

語りの中で言及されるように、A村では、語りが録音された時から数えて約3年半前の1987

年1月に、最大規模のカマリクンが行われている。ところで、このカマリクンは、実はA村では20数年ぶりに行われたものであった。隣のB村ではこの間もカマリクンが数年ごとに開かれており、A村の人々の多くはこれにも参加するから、人々はカマリクンと全く無関係であったわけではない。しかし、いずれにせよ、この長期間に及ぶA村のカマリクンに関する沈黙は、A村の人々のマプーチェの神への信仰がぐらついていたことを明白に示すものであり、事実この時期、カトリック及びプロテスタント諸派がA村の人々に布教攻勢をかけて、多くの村人がマプーチェの宗教を軽んずるようになっていたといわれる。語りの中に出てくるように、セバスティアン老自身の息子たち、娘たちも、この時期にマプーチェの宗教を捨ててプロテスタントに改宗してしまったのであった。その後、最近になってマプーチェの宗教への緩やかな揺り戻しがあり、それが1987年のカマリクンを生んだのであるが(久しぶりのカマリクンの主催だったため、多少ごちない部分もあったという)、ともかくA村の人々の信仰は現在も十分に堅いものであるとは言えない。

さて、この語りが録音された1990年は、丘の向こうの隣村、B村で再びカマリクンが行われた年であった。B村でこの年の12月にカマリクンが行われることが正式に決まったのは9月の下旬、つまりこの録音がなされたほぼ1か月前であった。わがA村は、B村とは深い親族の絆で結ばれており、B村のカマリクンでは準主催者の役割を果たすのが慣例になっている。それゆえ、こうした場合の手続きに従い、9月の中旬、B村からの使者が、A村の頭の一人であるセバスティアン老の所に到着し、B村で数カ月後にカマリクンが開かれること、ひいてはA村の人々がこの儀礼の遂行に協力することをB村の人たちが望んでいること、を正式にセバスティアン老に伝えたのであった。そして、セバスティアン老は、A村第一の長老であるアンブロンソ老と会談し、9月21日にA村全体の集会

を開くことが決められた。集会の目的は、A村の人々全員にB村の要請を公式に伝えることと、A村の人々が一丸となってB村の「兄弟たち」に協力するように皆の意志をまとめあげることであった。

次に紹介するセバスティアン老の語りは、この集会の約2週間後に録音されたため、彼の思考の中にはこの時のまだ新しい記憶が残っている。それゆえ彼は、語りの中でまず、9月21日の集会に至るまでの経緯を説明し、次にこの集会で自分が行った演説を丸ごと引用して再生するという形式で語っている。演説の中では、さらに、自分が子供の頃にみた夢と、この語りの中核をなす20年以上前にみた「ヘリコプターの夢」、そして、1987年に行われたA村自身でのカマリクンでの出来事が引用されている。このような入れ子式の引用の形態は、マプーチェの語りにおいてはごく日常的に見られるものである。

Ⅲ. ヘリコプターの夢

以下、セバスティアン老の語りの日本語訳を、枝葉を省いた形で紹介する。省略部分は〔…〕で示した。()内はすべて筆者による補足である。比較的多めに補足を行ったのは、意味の通りをよくすることにより、もとの語りの速度感を少しでも回復したいと考えたことによる。

<9月21日の集会までの経緯>

1. さて、それは9月の21日のことだった。我々はわがA村の草原に集まった。B村の人々が、カマリクン、つまり祈り事を行うことを取り決めたという知らせを受けたからだ。

2. 「人は自分だけの力で生きているのではない(神の助けがあるからこそ人間は生きられるのだ)」、そう考えて私はずっと生きてきた。

3. そこで(私そのような信仰者であるので)B村の使者たちは、私に会いに来たのだ。私を通

して、私のオジのアンブロシオ老にこのことを承諾してもらうよう、私に頼みに来たのだ。〔…〕

4. B村の使者は私に言った。「このことをあなたに伝えてほしい。私たちの長老はみな死んでしまった。わがB村にはもう年長の人たちはいない。私たち若い者しかいない。しかし、私たちは祈り事を受する者だ。それで、この祈り事のことをあなたに知らせようと来たのだ。〔…〕」

5. そこで、「そういうことなら、(喜んで)引き受けよう」、と私は言った。そして翌朝、夜が明けると、この村で一番の年長者であるアンブロシオ老のところに伝えに言った。

6. この言葉を伝えると、アンブロシオ老は喜んだ。「我々が生きている以上、これは当然のことだ。B村が心をつにしているならば、我々もこの祈り事に力を貸そうではないか。しかしまず、日を決めることにしよう。草原で皆で顔を合わせ、皆がそれを善しとしてはじめて、事はうまく進むものだ。どこでも、祈り事というものは、血族同士が一緒になって心を打ち込むものだ。」そうアンブロシオ老は言った。そんなふうに事は進んだ。

7. そして、その日(9月21日)がやってきた。我々は、草原に、いつもカマリクンを行う、我々の聖なる草原に集まった。さまざまなことが語られていった。そこで、私もひとつ、自分の考えを話したのだ。(以下、最後まで、この時の自分の演説の直接話法的引用である。)

<失われつつある伝統>

8. 「諸君、今日はみなここに集合している。女達はわずかにいるだけだが、男達、我が村の男達はたくさん集まっている。(たくさんの発言があったので)私の言葉は、もう言わずもがなかもしれない。だからほんの少しだけ話そう。

9. 「私が生きているのは、この祈り事のおかげだ。だから、祈り事を行うのだ。そして、(B村に住む我々の)血族がそろって賛成して、今回のカマリクンが立ちあげられた。だから、これは善いことだ、と皆で言おうではないか、諸君。

10. 「(近ごろ)我々は、マプーチェの祈り事を

あまり重んじないでいる。マプーチェの言葉を、伝承の語りや、我々は軽んじてしまっている。そうであってはいけないのだ。近ごろは、兄弟同士、親子同士でも、マプーチェの伝承の話をするこゝともない。(そうした伝承の話を通じて)息子たちとも考えを一つにすることがない。われわれは違ったふうになってしまっている。というのも、宗教が入ってきたからだ。ウィンカの物事、ウィンカの宗教、外国の宗教がやってきた。そして、マプーチェの者達は駄目になってしまった。

11.「私の息子達も、プロテスタントに入信してしまった。娘達も同じだ。そのために、私は(カマリクンには)一人で参加している。私は悲しみに沈む。(セバスティアン老のように特別な役職に就いている人は、カマリクンの際、息子達がいろいろと手伝うのが通例である。息子達がプロテスタントに改宗して、教義上の理由からカマリクンへの参加を拒否していることは、彼にとって、現実問題としても非常に困ることなのである)。

12.「かつて神は私に『カマリクンに身を捧げよ、マカナを手につけよ、おまえは男達を指揮する者となるのだ』と命じた。神は、夢の中で、私にそう命じたのだ。この夢を見たのは、まだ幼い頃だったが、それを忘れたことはない。そして、その通り今日まで来た(今日までサルヘントをつとめてきた)。そして幸い、生きている。

13.「ところが、私の息子達は全員、プロテスタントに入信してしまった。私は嘆き、悲しむ。宗教が、ウィンカの宗教が入ってきて、私の息子達はそちら側に引き渡されてしまった。我々は、祈り事を、天を見上げるということを、軽んじてしまった。どうして考えが変わってしまったのだろうか? [...]」

14.「あの夢、マカナを手にとられた夢は、まだ幼い頃、P村(セバスティアン老の母の出身地で、彼は子供の頃そこに住んでいた)で見たものだ。P村では私は(大きな)夢をよく見たものだ。ここA村では夢を見ない。P村には最高の祈り手があった、半ば精霊の人(火山から出てきたと伝えられる神話的な祖先)がP村にはいた。P村は偉大な村だ。そのP村で、私は夢を見た、あの夢を

与えられたのだ。それで、私は生き続けてきたので、今もお、こうしてサルヘントとして奉仕している。あの夢があったから、このことを続けているのだ。

15.「だから、私は悲しみに沈む。息子達の、娘達の誰もが、(カマリクンの時)私に付き添って助けてくれない。一人で参加しているのだ。ウィンカの宗教は、ますます盛んになってゆくのだろうか。そして、我々の大地での祈り事を、踏みにじってゆくのだろうか。私はそう言って、悲しみに打ちひしがれた。悲しみの中で、涙が流れる。生きている間ずっと、こうして一人で参加するのだろうか。子供のいない者と同じように、一人ぼっちで参加する、そう私は言う。息子は4人、他に娘達もいる。それなのに、まるで子供がいないかのようだ。だから、私は悲しい。

<ヘリコプターの夢>

16.「そして私は悲しみ、涙を流していたのだが、諸君、そんなとき、私は夢を見たのだ。この話はこれまで一度も話したことはなかったから、今日、話すことにしよう、私たちは生きているのだから。我々の祈り事、我々の知は、聖書のように(書かれた形で)与えられるのではない。神は我々に、考えを、霊気を与えるのだ。そうやって、夢の中で教えられて、そして祈り事がなされる。昔から、いつもそうだったのだ。

17.「昔、我々の大地にウィンカはいなかった。マプーチェだけがいた。[...]ところが、別の宗教が入ってきて、我々の考えは狂ってしまったのだ、諸君。別の宗教を信じて駄目になってしまったばかりか、その宗教さえ守らない。(マプーチェの宗教を捨てて)ある宗教を信じる、と試してみたものの、決してそれさえも守ることができない。結局、自分を見失ったままなのだ。これは同じことなのだ。

18.「そのあと、政治家達が入ってきた(ここでは特に、1970-73年のアジェンデ政権の時、国全体の激動を反映して、A村でもかなりの村人同士の対立が起こったことを想起していると思われる)。政治家達というのは、それぞれ別の考えを

持っているのに、それを同じ名前で呼んでいる。
 (本当の) 考え方はみんな別なのだ。[…] として我々も、正しい考えを失ってしまった。親子同士、兄弟同士、血族同士が愛を失ってしまった。我々の考えはあべこべになり、よい考えはなくなってしまった。

19. 「兄弟よ、わが血族よ、もう一度、お互いを愛し、心を一つにしようではないか。我々の物事を、正しく続けようではないか。だから、諸君、今日、私は話すのだ。私の言葉を、私の血族に話すのだ。私は生きているのだから。

20. 「私は夢を見た。私は涙を流し、悲しみに沈んでいた。そして、夢を見たのだ、諸君。よく聞いてくれ給え。『マプーチェの祈り事、カマリクンは続くのだろうか。もう絶ち消えてしまうのではないだろうか。プロテスタントやカトリックだけが、ますます勢いをもつようになるのではないだろうか…』 そんなことを私は考えていた。そして悲しみに沈み、泣いていた。それから一日か二日たった日のこと、夢をみたのだ。

21. 「夢の中で、私は、自分の家の納屋のところに、よりかかっていた。そして、天をじっと見上げていた。空では、アウン(反時計回りに円形を描きつつ馬に乗って走ることを)をしていたのだ。大勢の人々が、馬に乗って、天上の世界で、アウンをしていたのだ。その青い空を、わたしはじっと見上げていた。彼らがアウンをしていた、その場所をじっと目で追っていた。

22. 「すると、ヘリコプターが現れてきて、(やはり反時計回りに)二周回り、さらに二周回って、ちょうど四周回りきった(四はマプーチェにとって完成を示す数字である)。回りきると、ヘリコプターは、私がよりかかっていた納屋のそばに降下してきて、着地した。[…]

23. 「ヘリコプターが着地して、そしてタラップを一人の兵隊が降りてきた。さらにもう一人、兵隊が降りてきた。そして二人は、私に近づいてきた。手には、心臓をぶら下げて持っていた。そして、心臓を持ったまま、私の方に歩いてきた。そして、私のところに来て、兵隊は私に言った。『これは何だか知っているか?』 兵隊は私にそう

言った。『はい、知っています』 『では、何だ?』 『それはキリスト教徒の心臓です』、わたしはそう答えた。『よろしい、それだったら、つらいとき、悲しみに沈んでいるときは、空を見上げるのだ』、兵隊は、腕を天に向かって差し上げながら、私にそう言った¹⁰⁾。そういう夢だった。(録音では、この会話部分だけスペイン語になっている。おそらく夢の中で、この会話はスペイン語で行われたのである)。

<夢の意味>

24. 「さて、(1987年に我が村で) カマリクンがあった時のことだ。聖なる草原が定められ、ファン・Cとその兄弟達が、カマリクンを立ちあげた。[…]

25. 「ところで、以前、私はあべこべの考えを持っていた。カマリクンはずっとなかったし、プロテスタントの方が勢いがある、などと私は言っていた。間違っていたのだ、こういう考えをしていたのは良くないことだった。そんなところに、私の前に、青い空でアウンをしている姿があらわれてくれたのだ。これが、そのころ私が祈り事についてもっていた唯一の信仰だった。だから、この夢を与えられて、私はそれをずっと忘れずにいるのだ、諸君。

26. 「この夢(の意味)を、私は注意深く考えてみた。けれども、あの心臓がどういうことなのかだけは、どうしてもわからないのだ。年長の人たちにも聞いてみた。長老達にも聞いてみた。いったいあの心臓、私を訪ねてきた兵隊がぶら下げていたあの心臓は、何だったのだろうか… しかし誰も教えてくれる者がいなかったのだから、そのうち私もそのことを考えなくなった。

27. 「さて、そこで、カマリクンが(わがA村で)あった。皆の賛成があって、カマリクンが行われた。そのとき、私のオイのファン・Cが、私にこう語りかけた。(1987年のA村のカマリクンは、このファン・Cが、黄色い雄牛を自分の負担で出そうと申し出て、20数年ぶりに実現したものであった。ところで供儀獣を提供する人物は、カマリクンにおいて、神と祈り手に向かい、自分が

供儀獣を神に差し出す思いを、祈りの言葉を織り込みながら大きな声で語らなければならない。これはかなり深い知識を要する行為であるが、ファン・Cはそうした知識を持っておらず、そういう場合、より知識のある人に自分の役目を代理してもらうことが許されている。次に見るように、ファン・Cは、その役目を自分の遠縁の父方オジに当たるセバスティアン老に頼んだのである。）

28. (ファン・Cは言った)『『ところで、オジよ、我々は今日、聖なる草原に立っている。こうして祈り事を行っている。[···] 私は、カマリクンが行われるように、黄色い雄牛を用意した。[···] 私は、いけにえの牛を捧げるのだ。父なる神にお返しをするのだ。私は黄色い雄牛を用意した。聖なる火の中で煙となる、いけにえの牛だ。その牛を(祈りの言葉とともに)神に差し出す役を私のために引き受けてほしい。いかがだろうか、オジよ』 そう私に言ってきた。

29. 「さて、どうしたものか。私はそうした言葉は述べたことがない。(私はそうした大役はつとめた事がない、何しろ20年来この村ではカマリクンがなかったのだから)。しかし、物事は自分一人で行っているのではない。神が、私を人間として作り、私に考えを与えてくれたのだ。父なる神は私に力を与え、私を助け、私に哀れみを持ってくれるのだ。だから、この言葉も何とかなるのではないか。そう、私は考えた。『さあ、そういう時どんなふうに語りかけるのか、聞いたことがないし、知らない。けれども、引き受けよう。出来るだけのことをするまでだ。』と私はオイに言った。

30. 「そんな具合に、(神の助けのもとに)私は語り、そして祈り手(のアンブロシオ老)が私に対して答えた。私は、礼儀を込めていけにえの牛を祈り手に向かって差し出した。祈り手が、人を作った神、大地を作った神、全ての幸運を与える神に向かって牛を捧げるように、祈り手が神に祈るように。そして、私は祈り手に語りかけた。会話は続いた。

31. 「やがて、私の言葉は終わり、祈り手は牛を受け取った。そして、黄色い雄牛の心臓を抜き取るのだ。祈りの言葉が終わって、力仕事となる

(若い男達が雄牛を生きたまま地面にひっくり返す)。そして、黄色い雄牛の心臓が抜き取られ、チュエ(月桂樹に類似した樹)の枝に結び付けられた。(カラフケン湖周辺地域では、それぞれの供儀獣について一時間近く祈りを捧げた後、ある瞬間、獣から生きたまま心臓を抜き取って、これを天に向かって差し出しながら天の神に対する感謝の祈りを捧げる。ここで語られている場面は、黄色い雄牛の心臓が抜き取られた場面であるから、三日間続くカマリクンのうちでも最大のヤマ場である)。

32. 「そこで、『さあ、この心臓をもって、祈りを捧げよう。我々がここに集まったのは、この心臓のためだ。[···]』と祈り手が言った。『よろしい』と私は言った。そこで、いけにえの心臓をもって、父なる神を天に見上げながら、私は祈った。私はこんな役目は、やったことがなかった、しかし、何であろうと、言うべきことがあれば言おう、私は夢を与えられたのだ、そしてこれはカマリクンなのだから。

33. 「私は祈りはじめた。『今日、私は天のあなたを見上げています。あなたの息子、ファン・Cが黄色い雄牛を一頭、用意しました。彼がカマリクンのことを思い出して、我々は今日ここに集まっています。どうか、これを受け取ってください。あなたのいけにえは、正しい考えのもとに、いま(あなたに)捧げられているのです。あなたは人間をつくり、大地をつくり、家畜を作り、穀物をつくりました。私たちは、穀物を育てて、生きることができ、子供たちも生きてゆくことができます。父なる神よ、どうかわれわれに幸運を与えて下さい。今日、我々は天を見上げて、皆で集まっています。これまで、我々は皆で集まりませんでした。我々は間違っていました。どうか我々をお守り下さい。そのために、我々は今日、集まったのです···』

34. 「そしてその時私は、兵隊が私のところに心臓を持ってきてくれた、あの夢の意味を理解したのだ。私は、あの通りにすればよかったのだ、諸君。そうやって神は、私に予告を与えてくれたのだ。

35. 「(天の神のわざとはこのようなものだ), だから諸君, (マプーチェの) 信仰は続くべし, と, さあ, 皆で言おうではないか…」

36. (9月21日の集会で) そのように, わたしは皆に話したのである。

IV. 時空と反復

Ⅱ. では, マプーチェ社会において, 夢と神話と儀礼とが, イメージの想起というレベルにおいて相互に密接に結びついたものであることを示した。ここでみたセバスティアン老の語りも, 夢や神話や儀礼のテーマに直接, 間接に言及して, 様々なイメージを喚起するものとなっている。そこで, この語りがもっている意味を理解するために, この語りの部分部分がどんなイメージを喚起させているのかを検討しなければならない。

この語りがイメージを喚起させる過程について, 大まかに言って, 二つの異なった仕方を考えることができる。一つは, 時間と空間の直接的なつながりによるものであり, ここではそれを時空のつながりと呼ぶ¹¹⁾。つまり, 語りのそれぞれの部分は, それと同じ時空に属していた, しかし語りには表出しなかった部分を呼び起こして, イメージの中で一つの全体としての時空を作り上げようとするのである。そしてもう一つは, そうした時空のつながりの背後に隠れていて, それらを縦断する, 反復の働きによるものである。それは, 違った時空の中で同じものを反復することによって, ばらばらに存在している様々な時空を, しばしば意外な形で, 一つにまとめあげる。ただし, 現実にはこの二つのタイプのつながりは対立するものではなく, むしろ相互に浸透しあい, 最終的に前者は後者によって包み込まれてゆくと考えられる¹²⁾。この節では, 語りの内容に即しながら, こうしたプロセスを眺めてゆこう。

そこでまず, 語りの中で次々と現れてくる時

空の構造を検討することにする。

語りは, 最初, 解説的で記述的なトーンで始まる。明らかにこの部分は, 9月21日の自分の演説に話をもってゆくための導入部分であり, 語りのテンポ自体も比較的遅く, どちらかと言えば意識的で反省的な思考に基づいて話していることがわかる。もちろん, マプーチェの語りに一般的なように, ところどころ直接話法的引用がなされているが, それもこの部分では比較的簡潔なものにとどめられている。

そして, 7. で舞台がA村の儀礼場の草原に移された後, 8. から自分の演説の引用がはじまり, 結局これが語りの最後まで続くことになる。ここで注目されるのは, セバスティアン老が, この録音が10月8日に行われたことを思い起こさせる要素を途中で何一つ挿入せず, 自分の発言をそっくりそのまま再現しようと努めているということである。このため, 聞き手は, あたかも集会の実況録音をテープレコーダーで聞くかのように, 集会の様子を想像しながら聞くことになる。このことは, 語り全体の基調に大きな影響を及ぼしているはずである。マプーチェの人々にとって, この草原は特別な場所であり, 彼らはこの草原に来るときには自然にスペイン語を話すのを控え, マプーチェ風の身なりをするように努める。カマリクンでなくても, カマリクンの時と同じようにポンチョをはおり, ピフィルカという笛を吹きながら, 馬に乗ってこの草原にやってくる。従って, 語りがこの草原に言及するだけで, 人々はこうした一連のものを自動的に想起するはずなのである。

さて, 集会での演説の最初の部分では, ウィンカの物事がいかに自分達に浸透してしまったかが語られている。ウィンカの世界は, 儀礼場の草原が代表するようなマプーチェ本来の世界と真っ向から対立する世界であるはずである。しかしながら, それは, マプーチェの人々にとって, 自分の一部となってしまっているのである。実際, A村でも, 儀礼場を一步外に出るなら, そこにはもうウィンカの物事が溢れてい

る。儀礼場の中で純粋なマプーチェの領域（と彼らが考えるもの）を生きているセバスティアン老も、もう一方では、ほかならぬ息子達がマプーチェの伝統を捨てて、プロテスタントに改宗してしまっている。セバスティアン老の生は、幼少時に神のお告げを受けたP村、マプーチェとしての自分の人生の始原の時空であるP村と一方で連結すると同時に、他方では、自己の半身たる息子達を通じて、ウィンカの世界とも連結しており、相対立する両者の力によって引き裂かれている。10. から15. まで、対位法とでも呼ぶべき仕方でも語られてゆくマプーチェの時空とウィンカの時空との対立は、こうしたセバスティアン老の引き裂かれた内面をそのまま反映したものであり、それはそのまま、聞き手であるマプーチェの人々の中の、似たような内面の分裂状態に反響してゆくはずである。

語りはそのあと、夢の世界へと飛躍する。セバスティアン老がこの夢をみたのはもう20年も前のことであるから、この飛躍は表面的には過去の時空への飛躍である。しかし他方で、セバスティアン老の自宅の納屋という具体的な風景の上には、アウンや心臓といった、カマリクンを連想させる、何か超時間的なものが姿を現しており、そこでは、現実の世界と神話的な永遠の世界とが二重写しになった情景が思い浮かべられているのである。この二重性は、実は、この場面の背景をなす青空 *kalfüwenu* という言葉の中にも潜んでいる。なぜならこれは、文字どおりの青空を表すと同時に、マプーチェの宇宙観において天上の世界の最上層をも表す言葉だからである。

この場面に関連するテーマとして、次のような事実も重要である。マプーチェの人々は、彼らがカマリクンを行っているとき、天上の世界でも同時にカマリクンが行われているのだと主張する。A村の東方には、白い万年雪をかぶった火山がそびえているが（火山をマプーチェ語でピジャン (*pillañ*) というが、ピジャンはまた天上の世界の最下層をも意味する。このた

め、この火山は、彼らのイメージの中でつねに天界の最下層と混同される）、カマリクンが行われている日、きわめて信仰の強い人は、天界のうち地上に最も近い部分であるところのこの火山のあたりで、馬に乗ってアウンをしている姿を遠く幻 (*perimontu*) のようにみることがある、という。セバスティアン老の夢が、このテーマのひとつの変形であることは、ほぼ明白と思われる。

最後に語りは、1987年のA村でのカマリクンの時空に突入してゆく。ここで再び、演説がA村の儀礼場の草原で行われているという事実が重要である。というのも、語りが想起している場面は、三年半前、演説が行われているその同じ場所で、同じ人々が立ち会った中で起きた出来事だからであり、語り手も聞き手も、想像の中でまさに「その場にいる」のである。そして、この時空もまた、ヘリコプターの夢のそれと同じく、二重的である。なぜなら、儀礼という行為自体が、1987年のA村という具体的な時空で行われると同時に、そこを脱出して永遠の世界へ向かおうとするものだからである。そして、語りの頂点たる34. において、心臓のイメージを媒介として、このカマリクンの時空はかつての夢の時空と結び合わされる。語りはこの場面で、多重的でありながら同時に一つであるものを呼び起こす。人はそこで、自分が想像の中でどの時空にいたのかをほとんど忘れてしまう。最後の35. と36. の、セバスティアン老の締めくくりの言葉が、どこか蛇足のような印象を与えてしまうのは、おそらくそのためである。

さて、こうした時空の重なり合いがどのように起こっていくかを、今度は縦断的な反復のつながりに注目しながら、もうすこし細かくみてみよう。そのために、語りのなかで引き起こされるイメージの反復を、ここでは運動感覚的なレベル、具象的なレベル、存在論的なレベルの三つに分けて考えてみることにする。

第一に、この語りでは、反時計回りの運動、

四回転、そして天を見上げるという三つの動作が、聞き手の中に運動感覚的なイメージを想起させるものと考えられる。まず、反時計回りの運動であるが、既に述べたように、カマリクンにおいては、アウンのみならず、踊るときも走るときも、すべてこの向きに行われる¹³⁾。これらの運動はすべての参加者が行うものであり、それは人々に身体的なレベルからカマリクンを想起させるものなのである¹⁴⁾。また、ヘリコプターが四回まわって降下してきた、という部分も、マプーチェの人々に、この夢と神話的な世界との関わりを想像させる。なぜなら、既に述べたように、彼らにとって四は完成 *trür* を表す数字であり、とりわけ祈りに関わることでは、どんな動作も四の倍数回行うことが正しいことだとされる。さらに、天を見上げる、あるいは天に向かって腕を差し伸べるという動作は、天の神へのすべての祈りに関して反復される動作であって、これが鮮やかなイメージを喚起するものであることは疑いない。

確かに、セバスティアン老の語りの中では、この三つの動作は明示的にはヘリコプターの夢の中でしか出てきていない。しかし、マプーチェの人々にとって、この三つの動作は、最初にA村の儀礼場の草原が言及された時点で、またP村で見た夢でサルヘントのマカナが想起された時点で、自動的に呼び覚まされていたはずの一連のイメージの一部分なのであり、ヘリコプターの夢は、こうした身体的な感覚に訴えるものであるがゆえに、マプーチェの人々にとってきわめて強い印象を与えるものであるはずである。

さて、第二に、このような運動感覚的なイメージの上に、より具象的なイメージがのっている。何よりも強力にイメージを喚起するのは、草原という言葉であり、すでに触れたように、それは人々の中でマプーチェ的なもの様々なイメージを吸いこみながら広がってゆく。草原のほかにも、セバスティアン老にとって自己の象徴であるサルヘントのマカナや、夢と儀

礼の両方に現れる心臓など、語りの中には強い喚起力をもった具象的イメージが散りばめられている。

第三のタイプの反復は、語りの中で何度も出てくる、決まり文句による反復である。まず、語り全体を通じて繰り返して発せられ、しばしば唐突で、かつ定言的な、「人は自分だけの力で生きているのではない」（神の助けあればこそ生きられるのだ）、「私は生きている」（神のおかげで生きている）といったセリフについて考えてみよう。聞き手は、これらの言葉が出てくる度に、それまでの思考の流れを中断して、神の存在を思い出させられることになる。これらは、語られている〈今・ここ〉を瞬時的に廃して、神と人間とが出会う時空へ人を連れてゆく言葉である。この言葉が唐突に、定言的に発せられるのは、理にかなったことだともいえる。なぜなら、そのこと自体が、人間の存在のあらゆる瞬間に神の決定的な力が働いているという、マプーチェ的な存在の哲学の適切な表現となっているからである。

同様に興味深いのが、ヘリコプターの夢の前で頻出する、「私は悲しい」という表現である。確かにセバスティアン老の悲しみは、通常の意味だけでも理解可能なものではある。しかし他方で、悲しむこと、泣くことは、マプーチェにとって、人間の無力さを正直に認めることによって、神に対して、どうか自分に哀れみをもって自分を助けてくださいと訴えかける手段である可能性が強い¹⁵⁾。そうだとすれば、セバスティアン老が、11. から20. にかけて執拗なほど「私は悲しい」を繰り返すのは、神が自分を哀れんでこの夢を与えてくれたことを暗に示しているのであり、それはまた、悲しみを耐え続けていればいつかは、神が哀れんでくれる時がくるという、聞き手の人々への教訓にもなっているはずである。いずれにせよ、これらの決まり文句的な反復は、セバスティアン老の経験を、深いレベルでのマプーチェ的存在理解の中に位置づける役割を果たしていると考えられる

のである。

こうして、この語りは、一方で様々な時空を自分自身および聞き手の想像のなかに喚起させつつ、他方でそれらを縦断的に反復するものを媒介として、そうした相異なる様々な時空を一つの中心的な時空に関連させてゆく。この中心的な時空こそ、神話的な永遠の世界、神の完全な世界であり、夢や儀礼の中で、わずかに垣間みえる世界にはかならない。セバスティアン老の経験の偉大さは、まさにこの点に関連しているといえるだろう。つまり、1987年のA村のカマリクンにおいて、いけにえの雄牛の心臓を手に持ち、祈りの言葉を述べながら彼が経験したこととは、儀礼を行っている最中の自分の〈今・ここ〉が、夢の中に現れた兵隊の差し出した心臓を通じて、20数年前の夢の中の時空と融合し、さらにその夢を通じて、夢の中に内包された永遠の世界である青い天界（およびそこで行われているカマリクン）と融合する、という事態であった。一言でいうなら、儀礼の時空と夢の時空と天界の時空とが、セバスティアン老の記憶の働きの中で、瞬時的にせよ、一つのものとなったのである。

あるきわめて知識の深いマプーチェは、すべては天の上で出来上がっており、地上の人間はそれを型通り繰り返すだけだ、と私に説明した。知はすべてあらかじめ存在しており、それが夢や幻、儀礼、シャーマンのトランスなどを通じて、想起され、そして反復されることになる。もちろん、あらかじめ存在する本質的なものに対して、地上で実現される夢や儀礼などはその不完全な模倣にすぎないのであるが、ただそうした不完全なものが時空を越えて融合するとき、人は一瞬間、その本質的なものにふれることができる……セバスティアン老の語りが見聞している存在の哲学とは、このような、いかなればマプーチェ流のプラトン主義なのである¹⁶⁾。

V. 反復と「新しいもの」

このように、セバスティアン老の語りによって引き起こされるものは、ある種の重層的想起であり、全的な反復である。セバスティアン老の語りは、ウィンカの物事が充満した現実のA村で暮らしている人々の中に、マプーチェ的なイメージを、身体の運動感覚的なレベル、具象的なレベル、そして存在論的なレベルの三つのレベルにまたがって少しずつ反響させてゆき、増幅させてゆく。そしてその反響は、最後に一つの響きとなって、強力にマプーチェ的なものを肯定するのである。

しかし、問題はまだ続く。なぜなら、こうした読みは、この語りの正統的な読み方ではあるが、しかし一つの読み方にすぎないからである。この語りを別な角度から読んで行くなれば、逆説的なことに、セバスティアン老の語りによって行われたマプーチェ的な本質の反復は、マプーチェ的なものを強力に訴えると同時に、この語り自体をいわゆるマプーチェの「伝統」の中には収まりきらないものにしていとも言えるのである。ドゥルーズがヒュームを引きつつ言うように、「反復は、反復される対象に、何の変化ももたらさないが、その反復を観照する精神には、何らかの変化をもたらす」(DELEUZE 1992[1968]: 119)。セバスティアン老の語りだが、マプーチェ的なものの全的な反復を目指せば目指すほど、そしてそれに成功すれば成功するほど、その反復を眺めるセバスティアン老の精神の内部には、何か新しいものが入り込んでゆく。そして、彼自身は、しだいにマプーチェ的なものから遠ざかってゆくのである¹⁷⁾。

このことを考えるために、セバスティアン老の思考が、マプーチェ的な典型により近いような他の人々の思考と、どの点で異なっているのかを見てみよう。

まず、この語りをきわめて伝統主義的なマプーチェが聞いたとき、おそらく気になるであろう一つのディテールがある。それは、セバス

ティアン老の夢の中で、天の神からの使者の乗り物として現れているヘリコプターである。もちろん、青空でアウンが行われている中で、反時計回りに四回まわって降下してきたこのヘリコプターを、神が遣わしたものであると解釈することに異論を差し挟むマプーチェはいないであろう。しかし、第一に、マプーチェの神話的伝承によれば、神からの使者は、普通コンドルやモリバトなどの鳥の姿で現れ、それが人の姿に変身することになっており、ヘリコプターが現れるのは異例である。第二に、さらに重大なことには、自動車や飛行機、ヘリコプターといったウィンカの乗り物は、マプーチェの夢理論では、邪悪な精霊の化身として理解されるのが普通なのである¹⁸⁾。このことをどう考えたらよいであろうか。

この例は、実は、セバスティアン老の思考の中で、いかなればマプーチェ的な伝統の暗い側面が排除されていることを明白に示すものということができる。邪悪な精霊 (*wekufii*) とは、妖術師が送り込んでくるものであり、それは、羨望、猜疑、そして暴力をもはらんだ、マプーチェの社会関係の暗黒部分と直結するものである。セバスティアン老は実際、こうした信仰を全面的に否定している。だからこそ彼の中では、ヘリコプターは、そうした否定的なイメージを脱ぎ捨て、コンドルや鳩の役割を受け継いで、神の使者の乗り物となりうるのである。

同じことは、「過ち (*yafkan*)」と「罰 (*castigo*)」の概念についても言える¹⁹⁾。伝統主義的なマプーチェの人々が、妖術以上に恐れているのが、神に対して、するべきでないことをしたり、言うべきでないことを言ったりするという、ちょっとした過失 (意識的な過失と無意識的な過失の両方が含まれる) であり、これは即座に本人または家族の病気や死という重大な事態を招くことになっている²⁰⁾。今日、マプーチェの信仰が維持されつづけるために、この過ちと罰のメカニズムが大きな役割を果たしているのは疑いのないところで、それがまた、今日

のマプーチェの伝統に独特の重苦しさを与えているともいえる。ところが、セバスティアン老の中では、この過ちと罰の概念がほとんど不在なのである。たとえば、25. において彼は、自分が一時期プロテスタントの方が優勢である等と言っていたことを告白している。これは、普通のマプーチェならまだしも、サルヘントというきわめて重要な役職をつとめる人間としては、重大な「誤った発言 *weludiungun*」なのであって、直ちに本人と家族に不幸を引き起こしても仕方がないと見なされるようなエピソードである。ところが彼は、こうした過ちを、罰の重みを持たない、単なる信仰上の過ちとしてのみ回想するのである。

こうしてセバスティアン老の思考は、伝統の重圧から解放されて、自由に働くことができる。これが、彼の語りのスタイルのもう一つの特徴、すなわち、リアリズムともつながっているものであり、それゆえに彼の語りは民族誌的背景を共有しない者にとってさえ近づきやすいものとなっているのだ。より伝統主義的なマプーチェの同種の語りのように、神話的伝承がそのまま絶対的な真実として引用されるのではなく、ここでは、信仰とは何かというテーマが、一度伝統に由来する諸前提を取り払い、語り手自身が根本的な懐疑を経験した上で、夢の経験と儀礼の経験をへて、信仰へ回帰してゆくという、一種の発展的ドラマとして再構成されている。そうしてゼロから積み上げられているからこそ、伝統は、この語りの中でその全貌を現しているのだ、とも言えるのである。

これが、ある面では伝統を重層的に反復しているセバスティアン老の語りの中でつくり出されている差異である。これは、全く新しいものであり、この意味で、セバスティアン老は、新しい信仰の形成者となっているのである。エリアーデは、『創世記』の、ヤーヴェに自らの子イサクをいけにえとして捧げようとしたアブラハムの行為に言及して、アブラハムは習慣の命じるところに従ってその供犠を行おうとしたので

はなく、ヤーヴェに対する深い信仰のみに基づいてこれを行おうとしたのであり、それゆえアブラハムのこの行為は、新しい宗教的経験としての、信仰の行為だったのだと論じる (ELLADE 1963[1954]: 145)。セバスティアン老の経験は、ある点でこのアブラハムの行為に類似したものだといえよう。つまり彼もまた、一度慣習を取り払った上で、新たに伝統を反復しなおすことにより、新しい経験としての信仰を獲得したのである²¹⁾。

そしてまさにこの点から、マプーチェ的な伝統の破壊者としてのセバスティアン老の姿が浮かび上がってくる。なぜなら、彼は懐疑から出発して自らの信仰を再構成してしまったがために、マプーチェの伝統のうちで、彼の新しい信仰からみて非合理的な部分を、おそれることなく切り捨ててしまうからである。祖先からの神話的伝承全体に忠実で、そうした伝承が定める規則を破ることをおそれる伝統主義的なマプーチェの人々とは対照的に、彼がおそれるのは、夢による神の直接的啓示だけなのだ。

ここからさらに一步進むのは困難ではない。つまり、セバスティアン老からその息子達へ、という新しい反復のサイクルがここから始まると考えることもできるのである。彼の息子達が、マプーチェの伝統を捨ててプロテスタントの側に走ってしまったのは、ゆえなきことではない。彼らは、父の根本的懐疑を反復しただけなのだ。事実、彼の息子の一人はプロテスタントへの改宗の動機について、次のように語っている。

私はかつてカマリクンにも参加していたし、よく宴会に出かけて、皆と一緒に酒を飲んで酔っぱらったりしていた。ところが25歳のころ、ある宴会で喧嘩に巻き込まれ、ほとんど殺されそうになって、町の病院に運ばれて丸三日間意識不明の状態を過ごした。そしてこの時、神が私の目

の前に現れて、私は神と直接、話をする事ができたのだ。この時私は、本当に頼れるのは神だけだ、ということ悟った。カマリクンの時、兄弟よ、と美しい言葉でいつも自分に呼びかけていた村人達は、いざ私が殺されそうになった時、少しも私を助けてくれなかった。結局、本当に自分を助けてくれるのは、神だけなのだ。それで、私はマプーチェの宗教をやめて、キリスト教を信じるようになった。

一度すべてを疑った上で、神とのコミュニケーションのみを確実な根拠と認め、自らの信仰を再構成する、という父の思考様式は、ここで見事に息子によって繰り返されている。ただ、それが異なった帰結を生んでしまっただけである。より細かく言うなら、父の夢の中ですでに、神がその使者を、伝統の教えるようなコンドルや鳩の形ではなく、ヘリコプターに乗った兵隊の形で送るという変容が起こっていたこと、さらに兵隊との会話がスペイン語で行われていたことを思い起こしてもよいだろう。息子の幻覚経験のなかで、この変容はさらに一步おし進められ、神自身が直接姿を現すという形になっている。そしてその結果が、プロテスタントへの改宗だったのである。

この論文では、まず、マプーチェ社会における夢が、神話や儀礼と、イメージの領域においていかに深く結びついているかを示した。次に、セバスティアン老の語りをとりあげ、この語りの中に結晶化しているセバスティアン老の経験が、何を想起させ、何を反復しているのかについて子細に検討し、それが運動感覚・具象・存在論という三つの次元に広がった重層的な想起であることを主張した。そして最後に、そのような「反復を観照する精神の内に起こった変化」を検討し、この一見純粋に伝統主義的な

語りが内部にはらんでいゝ異種混淆性を明るみに出そうと試みた。

人々はなぜ、夢のような、不確実で、無意識的な精神のはたらきにどっぷりと浸かった現象に、真実を見いだそうとするのか。これがこの論文の冒頭の問いであった。セバスティアン老の夢の語りのケースが示唆しているのは、まさにそれらが無意識に浸かっているからこそ、そこで見いだされる真実は力強く感動的なものだ、ということである。なぜなら、そこでは、無意識や身体レベルをも含めた全的な反復が起こるからである。

今日、いまだに多くのマプーチェの人々が、様々なハンディキャップにもめげず、チリ社会への完全な同化を拒否して、マプーチェであり続けようとしていることは、彼らが意識的にそれを選択しているから、ということだけでは説明がつかないように思われる。おそらくそれは、夢や病氣、偶然の出来事などの、意識の外にある現象を通じて、依然として彼らの前にマプーチェ的な「真実」が開示され続けているからである。そしてこの「真実」は、セバスティアン老にとってのヘリコプターの夢がそうであったように、ほとんど強制的に人々を自らに従わせる。S. フロイトは、『快感原則の彼岸』において、生のあらゆる原則の彼方にある人間の根源的衝動としての、「以前の状態を回復するという要求」について語っている (FREUD 1970[1920])。セバスティアン老たちが、意識外の現象の中にマプーチェ的なものを見いだしつつづけている背景には、最も深いレベルにおけるこうした力の作用があるのかも知れない²²⁾。

ただ、ここで問題なのは、今日のマプーチェにとっての「以前の状態」が、いわゆる伝統的なマプーチェ社会の物事だけではなくてしまったことである。彼らは今や、スペイン語の使用をはじめとして、日常生活のかなりの部分を、チリ社会の論理にしたがって行わざるを得なくなっているし、そうした発話や行動の記憶は、一つの存在のあり方として、彼らの無意識

や身体底にまで根付いてしまっている。それゆえ、相矛盾する「以前の状態」を回復すべく運命づけられた彼らの想起は、必然的に異種混淆的なものとならざるを得ず、この異質なものの混淆は、ある時には新たな美しい和音を生み出すとともに、別の時には激しい不協和音となって鳴り響くのである。マプーチェ的なものとウィンカ的なものが奇妙に圧縮された、セバスティアン老の夢の中のヘリコプターは、まさにこうした状況を象徴するものになっているだろう。

注

- 1) この論文は、1990年2月から1992年2月にかけて、チリ側のカラフケン湖周辺地域で行った現地調査に基づいている。その際、庭野平和財団の研究助成を受けた。また、この論文の問題を考える段階で、福島真人氏および同氏の主宰する「文化の身体的基礎」研究会の参加者諸氏から受けた刺激が有益であった。赤堀雅幸氏からは草稿に対するコメントを頂いた。
- 2) イメージ (image) という言葉について、例えばP. フルクニエは、「元来は視覚を通して、しかし後には感覚一般を通して、知覚された物の心的表象。感覚的表象として、これを知的表象である観念と対立させるのが古典的な考え方だが、感覚論者らはこの対立を容認しない」という定義を挙げている (Foulquié 1992[1962]: 342)。この論文での筆者のこの言葉の使い方は、最後の立場に近いものである。
- 3) 調査を実施したカラフケン湖周辺地域の人々は、マプーチェ全体からみれば、比較的伝統主義的な傾向が強い人々であるといえる。しかしここでも、数世代にわたる土地の分割相続によって居留地の土地がますます手狭になりつつある事情はかわらず、このため人々はきわめて頻繁に近くの農場に働きに行ったり、サンティアゴやアルゼンチンに出稼ぎ (さらには移民) に行ったりして現金収入を得ている。こうしたことが人々をさらなるチリ人化の方向に押し出しつつあることは疑いない。

- 4) たとえば、都市のパン屋で売っているパンは、ウィンカのパンと呼ばれ、自家製のパンと区別される。もちろん、ウィンカのパンを一切口にしないのではなく、日常生活の中では、むしろ喜んで食べる人も少なくない。しかし儀礼の際は、ウィンカのパンは避けられ、カマリクンにおいては厳格に排除される。なお、カマリクンは、地域によっては *ngillatun kawin* あるいは単に *ngillatun* とも呼ばれる。カマリクンについては、箭内 (1993) により詳しい紹介がある。
- 5) マプーチェの霊的存在の体系はきわめて複雑である。ここでは、全ての霊的存在の上にあり、彼らが *Elchen Chau Elchen Ñuke* (人を造った父母)、*Wenumapu Chau Wenumapu Ñuke* (天界の父母)、*Chau Dios Ñuke Dios* (父母なる神) など様々な仕方で呼びかける神を、一様に「天の神」と訳しておく。マプーチェの人々にとっては、「天の神」以外の霊的存在もみな重要であり、特に夢に関しては *Pillañ Fucha Pillañ Kushe* (火山の父母) と呼ばれる存在が重要であるが、この論文ではあえて触れなかった。
- 6) 夢の語りの結晶化のプロセスに関し、これを F. C. パートレットが行った反復再生法、系列再生法のような実験の結果と比較してみるのには興味深い作業であろう。BARTLETT 1983 [1932] 参照。
- 7) このあたりの、夢の視覚的イメージの重要さと、夢から行為への移行は、あるレベルにおいて、精神分析における「幻想」と「行為化」(及び「アクティング・アウト」) の概念にそれぞれ関係づけられるもののように思われる。例えば『精神分析用語辞典』(LAPLANCHE et PONTALIS 1977[1973]) の当該項目を参照のこと。
- 8) 近くカマリクンが行われるというような時期には、人々の関心はますますカマリクンに向けられるから、それに関連した夢をみる頻度も高くなるものと思われる。筆者自身、現地調査の間に、何度かカマリクンに関連する夢をみた。
- 9) ここでとりあえず村と訳したのは、マプーチェ語の *mapu* であり、カマリクンを一緒に行う人々が住む領域を意味する。今日では政治経済的機能は全く持っておらず、宗教的活動においてのみ機能している単位である。
- 10) マプーチェにキリスト教を布教したカトリックの神父達は、キリスト教の神とマプーチェの神をあえてある程度混同させながら、次第にキリスト教に導いてゆくという方針をとったため、マプーチェの人々の間では、キリスト教徒というのは結局、マプーチェの宗教と同じようなものだと考えている人が多い(ただし、プロテスタントに改宗したマプーチェたちは、両者を峻別する)。従ってここでの「キリスト教徒の心臓」は、信仰の深いマプーチェが神に捧げる心臓、というほどの意味であると思われる。
- 11) ここでの時空の概念は、M. バフチンの「クロノトポス(時空間)」の概念に想を得たものであり、語りが前提とし、またそれによって創り出される時間と空間の相互に関連した全体を指す。バフチンがクロノトポスについて言うように、それらは、「互いに組込み合い、共存しあい、からまりあい、入れ替わり、対置され、対立し、あるいはより複雑な相互関係に組み入れられる」(BAKHTIN 1989[1975]: 335)。
- 12) ここでは、語りによって引き起こされるイメージを、ドゥルーズがシーニュ (*signe*) と呼んだものと類比的に考えて考察している。ドゥルーズにとって、シーニュとは、物質や対象や存在が精神の内にむけて発するものであり、それぞれのシーニュの意味は、多くの場合覆われた (*enveloppé*) ままになっているが、精神の作用によって、その意味は覆いから解放されて展開してゆく (*se développer*) ことができる。こうしたシーニュの展開は、たとえば、不随意記憶の経験(プールの『失われた時を求めて』)の中の、マドレーヌの味によって引き起こされた経験のような)の中で生じうるものである。しかしこれは部分的な展開でしかなく、全的な意味でのシーニュの展開は、ドゥルーズによれば、芸術の中ではじめて起こりうるものである。DELEUZE (1986[1964]) を参照。
- 13) あるマプーチェは、時計回りの運動は邪悪な精霊のものであり、正しい運動は常に反時計回

- りだと私に説明した。反時計回りに対する彼らの執着は、日常生活の中でもみられ、例えばマテ茶を回し飲みする際でも、なるべく反時計回りの順番で飲む傾向がある。ただし、カラフケン湖周辺以外の地方で、儀礼の際、別の動き方の踊りを行う地域もあることを付記しておく。
- 14) 特別な役職についていないマプーチェたちは、しばしば「カマリクンに行く」という代わりに、「プルン（儀礼的な踊りのこと）を踊りに行く」という表現を使う。彼らの中では、カマリクンは、第一義的に、踊りの運動感覚と結びついているのである。
- 15) マプーチェの人々は、儀礼的な会話をやっているとき、実にしばしば涙を流す。こうした時に発せられる文句は、「私は哀れまれるべき人間だ (Inche ñi kuñifallngen)」であるが、何事につけても神の存在を意識するマプーチェの思考にそって考えるならば、そこに神に対して哀れみを求めるニュアンスが込められていることはおそらく疑いないように思われる。つまり、泣くことは、神に対して自分の弱さを示す、積極的な信仰の行為だと考えられるのである。語りの29. の独白部分におけるセバスティアン老の思考方法は、この点を裏付けるものであるように思われる。
- 16) ここではもちろん、プラトンの想起説を念頭においている（例えば『パイドン』の73C-77D参照）。これに関連して、M. プルースト（ドゥルーズが言うように彼も独自の仕方ではプラトン主義者だったのだが）の次の一節を引いておいても無駄ではないだろう。「(…) すなわち、皿に当たるスプーンの音、不揃いな敷石、マドレーヌの味などを、現在の瞬間において感じると同時に、遠い過去の瞬間においても感じていた結果、私は過去を現在に食い込ませることになり、自分がいるのが過去なのか現在なのかも判然としなくなっていた、ということである。実を言うと、そのとき私の中でこの印象を味わっていた存在は、その印象のもっている昔と今とに共通のもの、超時間的なものの中でこれを味わっていたのであり、その存在が出現する

のは、(…) すなわち時間の外に出たときではないのであった。そのことは、私が知らず知らずにプチット・マドレーヌの味を再認した瞬間に、死にかんする私の不安がやんだ理由を説明してくれるものであった。なぜならこのときの私は超時間的な存在であり、したがって将来に訪れる苦難をも気にしない存在だったからである。」(PROUST 1992: 449-50)。

- 17) 念のために強調しておくなら、Ⅳ. における反復とⅤ. における反復は、同じ現象の二つの側面であって、別々の現象を同じ名で呼んでいるのではない。ドゥルーズは、反復の概念を、物事を同一的なものに還元しようとする一般性の思考を突き崩すための道具として提起したが (DELEUZE 1992[1968])、ここで目指していることは、そうした反復の概念に従いながら、一方で「伝統」という名がもたらす一般化、他方で「創られた伝統」という名がもたらす一般化を、同時に突き崩すこと、あるいは少なくともそうした一般化の枠にはまり込むことを免れることである。
- 18) 実際、別の村でサルヘントをつとめる、あるマプーチェは、夢の中に飛行機が現れ、自分のそばに着地して、そこからウィンカ（非マプーチェのチリ人）が出てきたので、夢見心地にもこれは邪悪な精霊の夢だと考えて、それを破るために、眠りながら天の神に向かって祈りを始めたことがあると語っている。
- 19) 罰 (*castigo*) の概念はマプーチェ語にはなく、スペイン語の単語が借用されている。これはおそらく、過ち (*yafkan*) という言葉自体が既に罰の概念を含んでいるからであろう。今日、スペイン語式の発想に慣れてしまった大半のマプーチェは、もっぱら罰 (*castigo*) という言葉を用いており、過ち (*yafkan*) という本来のマプーチェ語を覚えている者はあまり多くない。
- 20) 彼らがこうしたことに神経をとがらすのは、次のようなケースが頻繁に見られるからである。例えば、誰かが重い病気となり、シャーマンが呼ばれて治療儀礼が行われる。シャーマンは、トランスに入ると、二、三のやりとりの後、

病人（あるいはその家族）が〇〇の儀礼の時に××の過ちを犯した、あるいは、当然やるべき〇〇の儀礼を未だに行っていない、と宣告する。そして、病気の原因はまたもや天罰ということになるのである。

- 21) この両者の類似は、表面的なものではないのかもしれない。というのは、セバフティアン老がキリスト教の強い影響を受けていることは明らか事実であり、ある意味で、この語りは、キリスト教的思考の影響下でマプーチェの宗教を再構成したものとも考えることもできるからである。このような再構成の作業は、より不明瞭な形では、今日の多くのマプーチェの人々が多かれ少なかれ行っていることだと考えられる。
- 22) 精神科医の小川豊昭は最近、精神分析の症例にあらわれた反復の問題について、興味深い検討を行っている。小川（1993）参照。

参考文献

- BAKHTIN, M. M. (バフチン)
1987 [1975] 『小説の時空間』(ミハイル・バフチン著作集6) 北岡誠司訳, 東京: 新時代社。
- BARTLETT, F. C. (バートレット)
1983 [1932] 『想起の心理学—実験的社会的心理学における一研究』宇津木保・辻正三訳, 東京: 誠信書房。(Remembering: A Study in Experimental and Social Psychology. Cambridge University Press.)
- DELEUZE, Gilles. (ドゥルーズ)
1986 [1964] *Proust et les signes*, 7^e éd., Paris: Presses Universitaires de France. (邦訳『プルーストとシーニュ』宇波彰訳, 東京: 法政大学出版局)
1992 [1968] 『差異と反復』財津理訳, 東京: 河出書房新社。(Différence et répétition, Paris: Presses Universitaires de France.)
- ELIADE, Mircea. (エリアーデ)
1963 [1954] 『永遠回帰の神話』堀一郎訳, 東京: 未来社。(Myth of the Eternal Return, New York: Pantheon Books.)
- FOULQUIE, Paul.
1992 [1962] *Dictionnaire de la langue philosophique*, 6^e éd., Paris: Presses Universitaires de France.
- FREUD, Sigmund. (フロイト)
1970 [1920] 「快感原則の彼岸」小此木啓吾訳『フロイト著作集6』所収, 京都: 人文書院 150-94頁。(“Jenseits der Lustprinzips”.)
- KRACKE, Waud.
1987 “Myths in dreams, thought in images: an Amazonian contribution to the psychoanalytic theory of primary process.” in Barbara TEDLOCK ed., *Dreaming: Anthropological and Psychological Interpretations*, Cambridge: Cambridge University Press, pp.31-54.
- LAPLANCHE, J. et J.-B. PONTALIS. (ラブランシュとポンタリス)
1977 [1973] 『精神分析用語辞典』村上仁監訳, 東京: みすず書房。(Vocabulaire de la psychanalyse, 4^e éd., Paris: Presses Universitaires de France.)
- 小川豊昭
1993 「反復する運命」三好暁光編『精神医学と哲学』所収, 東京: 金剛出版, 71-110頁。
- PROUST, Marcel. (プルースト)
1992 『失われた時を求めて(下)』鈴木道彦編訳, 東京: 集英社。(A la recherche du temps perdu.)
- 箭内 匡
1993 「馬上のマプーチェ」『季刊民族学』65号 96-103頁。

Remembrance and Repetition: Analysis of a Mapuche Dream Narrative

YANAI Tadashi

The Mapuche Indians of Chile have always been considered to be a fairly acculturated people. Yet, up to now, many of them have continued to define themselves to be Mapuche, in spite of the continual pressures from Chilean society. A remarkable fact in this concern is that they keep paying great attention to their dreams. "Dreams tell you the Truth", they always say, and this Truth naturally seems to influence their thoughts and conducts considerably. This is why I am interested here to examine what dreams are for them, and what kind of Truth they adhere to.

In this paper I intend to analyze a narrative given by Sebastián, an old Mapuche man, in order to illustrate how the Mapuche Indians today are living their Truth. In the narrative, Sebastián relates how he dreamt, more than twenty years ago, a dream that I name here as "the helicopter dream"; what this dream meant to him during those years when things were getting more and more unfavorable for the Mapuche way of life; and finally, how the "real" meaning of this dream was revealed to him in 1987, that is, twenty years after he dreamt it.

* * *

Before taking up this narrative, however, let us briefly consider some Mapuche ideas about dreams, and the close relationship between their dreams (or some of their dreams), myths and rituals.

The Mapuche insist that dreams should always be told, and curiously, they say that it is because by this way dreams can easily be remembered. Thus they often spend some morning hours recounting their dreams to each other. They do not hasten too much to find the meaning of each dream in general, and some of them affirm that the meaning will become known by itself when the time comes. This might be one of the reasons why they say that they should always remember their dreams.

Among many kinds of dreams, the Mapuche pay special attention to a genre of dreams that is called *fūta peuma* ("great dreams"): dreams which are considered to be messages from *Wenumapu Chau Wenumapu Ñuke* (their supreme God) or from some other spiritual being. These dreams have to be remembered with great care, and they are repeatedly recalled by the dreamer. It should not be difficult to imagine that these "great dreams" may be related to Mapuche myths. Indeed they do have many themes in common. Actually, Mapuche mythology contains in itself innumerable accounts of "great dreams" dreamt by their ancestors.

Another important point about "great dreams" is that they often include some direct or indirect messages which urge the dreamer to realize some ritual act. For example, once a Mapuche dreamt of a yellow bull, which was a clear request for him to convoke a *kamarikun*, their greatest sacrificial ritual (in which the chief sacrificial animal is the yellow bull). This was something impossible for him to realize at that moment, but he kept this dream carefully in his memory; and sixteen years later, he finally convoked *kamarikun*, and thus fulfilled God's demand.

In this way, Mapuche dreams, or more exactly their "great dreams", are very closely related to Mapuche myths and rituals. This point is also attested by the fact that both mythical themes and ritual scenes appear quite frequently in their dreams. And there would be little doubt that these images, presented in their dreams, appeal much to the Mapuche as something related to their ideal way of life. This is the point that I will examine with Sebastián's "great dream" — "the helicopter dream".

* * *

In his narrative, after some introductory comments, Sebastián first recollects how he was some twenty years ago when he had the dream. On the one hand, he was an earnest believer of the Mapuche religion, and held (and still holds) the important office of *sargento* in the village ritual organization. Actually, he says that he was destined to do so because, as a child, he received a dream message from God. On the other hand, however, those years were when the village people were strongly influenced by both Catholic and Protestant missionaries; so much so that all Sebastián's sons and daughters were converted to Protestantism, thus rejecting totally their father's religion. Sebastián, in this manner, was torn internally by the two contradicting forces. He felt so alone that sometimes he almost lost his faith in the Mapuche God.

It was during one of these moments of doubt that he had his dream. In the dream he was at the barn of his house, watching the blue sky. There he saw many people running on horseback, circling counterclockwise, that is, just as the Mapuche do in their sacrificial ritual of *kamarikun*. Then he suddenly noticed a helicopter circling with them. It made four turns (the number four means completion for the Mapuche) in the sky and then landed near Sebastián's house. As he watched it, two soldiers came out of the helicopter, and came near Sebastián. One of them had a heart (which is clearly reminiscent of the heart of sacrificial animals that are presented to God in *kamarikun*) in his hand. He came to Sebastián and asked him what it was. Sebastián answered that it was "the faithful's heart". Then the soldier said: "All right. So, when you feel sorrowful, just look up to the sky!" and extended his arm up to the sky.

This dream impressed him so much that it remained with him for years to come. It was, as he says, the only solid basis for him to maintain his faith in the Mapuche religion. But there was one thing in the dream that he never got to understand: the meaning of the heart. He asked the elders, but no one could give him a clear answer.

Years passed. In 1987, there was a weak resurgence of the Mapuche religion among the

villagers, and they held a *kamarikun* after some twenty years. Sebastián, as his village's *sargento*, now had to play quite an important role in the ritual. He was not confident of himself, since he evidently lacked experience, but he believed that God would help him.

The day came. The village priest prayed. Some people danced and ran at Sebastián's command, circling counterclockwise around the altar; others rode on their horses and ran circling counterclockwise around the ritual field. And then came the climax: the young men turned the yellow bull (the main sacrificial animal) over, and extracted its beating heart. The heart was passed to Sebastián, who was supposed to pray to God with it in his hand. At that moment, he did not know exactly how he had to pray because he had never played such an important role. Anyway, he decided to begin praying. Suddenly, he remembered his dream of twenty years ago: he remembered how the soldier had the heart in his hand, and what the soldier told him. And at that precise instant he knew what the prayer should be like. This, he says, was the very meaning of the heart.

* * *

Now I will analyze this narrative from two interrelated perspectives. First I will see how the narrative moves in the narrator's imagination from one plane of spacetime to another. Then I will examine the recurrent images found throughout the narrative.

At first, the story refers to the contradiction between the Mapuche world and the Chilean world. The former is, in Sebastián's mind, related to the almost mythical memory of his childhood dream, and he knows that it is decisively important for him. The latter, however, is also important and he cannot separate himself from it, as he cannot separate himself from his sons and daughters.

Then he recounts the helicopter dream. The spacetime of this dream is a concrete one, because it happened during his sleep some twenty years ago. Nonetheless, it is also reminiscent of the eternal world of Heaven (*Wenumapu*), which is represented by the people in the sky. Actually, in this case, there is an ambiguity in the very word "blue sky" (*kallfüwenu*), because it means both the blue sky itself and the uppermost layer of Heaven. Now, the same kind of doubleness can be found in the *kamarikun* scene in 1987. It was held in real place and time, and simultaneously it is penetrated by timeless elements such as ritual symbols. In the final part, the image of the heart triggers Sebastián's memory of the helicopter dream. In his imagination, the spacetime of his dream, that of the ritual and that of the world of Heaven are all dissolved together, and are absorbed into the eternal world of God.

It would be clear from above that the narrative is full of recurrent images which go through several planes of spacetime and unite them. First, there are some repeated images of movement such as counterclockwise movement, four-time repetition, and the act of looking up to the sky: these are important because they appeal strongly to the motor-sensory imagery of the Mapuche, and recall their memory of their rituals.

Secondly, some powerful symbols appear repeatedly in the narrative; the most important of all is the heart, on which the narrative finally converges. Thirdly, there are some expressions such as "I live" or "I am sad" (which do not appear in this summary) that appear here and

there in the narrative. These expressions can be considered to be related to the Mapuche's profound ideas about their existence, and they give a philosophical touch to this narrative.

All these points seem to indicate that this narrative achieves an admirable presentation of the Mapuche religious ideas. It resorts to the various spheres of their imagery such as the motor-sensory, the symbolic and the philosophical, and finally refers to what could be called their religious Essence, which is glimpsed in Sebastián's imagination at the last moment. Without any doubt, this was the Truth that Sebastián found.

* * *

A problem remains, however. Why was Sebastián able to reproduce the Mapuche Truth so well in this narrative? It will be seen that this question is related to his realism. But let us first examine if Sebastián does not deviate in any way from the traditional Mapuche thinking in this narrative, with all his repetitions of traditional ideas.

In fact, there is a detail which may seem strange for the traditional Mapuche: the helicopter. There would be no doubt, in this dream, that it serves as the vehicle of the messenger from God. Nonetheless, according to the normal Mapuche interpretation of dreams, helicopters, along with cars or planes, are thought to be transformations of malignant spirits sent by witches.

Another remarkable detail is the confession of his unfaithful statement (which does not appear in this summary): he once said that the Mapuche religion will probably be overwhelmed by Protestantism. This would be an impermissible statement for a person in his position, but Sebastián does not seem to feel guilty about it and simply says that he was in the wrong.

These facts indicate, in a word, that the dark elements of traditional Mapuche ideas are completely eliminated from Sebastián's thinking. He does not believe in witchcraft, and that is why the helicopter can appear as something divine in his dream. Moreover, he does not accept those fatalistic ideas about error and guilt, and that is why he can move freely from the Mapuche way of thinking to the Chilean one. Hence his realism. While the traditional Mapuche narratives begin in general with unquestioned mythical truths, Sebastián's begins with a profound doubt. His is not a combination of mythical stories, but is composed as a developmental drama in which the narrator begins with nothing and ends with belief. It is certainly thanks to this fact that we are able to follow him in his approach to the Truth in this narrative.

It is clear that in this regard Sebastián can also be seen as a destroyer of his tradition, because he feels no fear of rejecting some of its fundamental elements. In fact, another series of repetition begins here, that is, the repetition from Sebastián to his sons and daughters. In a sense they did not betray their father; they just repeated their father's fundamental doubt, only to produce different results.

* * *

In this paper I have tried to examine, by analyzing Sebastián's narrative, what the Truth of their dreams is for the Mapuche today. Now it could be said that the Truth of their dreams means a lot to them because it triggers in the dreamer an experience of profound repetition of their ideal, including the unconscious or physical level.

But what we can also learn from Sebastián's case is that one type of repetition does not exclude other ones. This is an especially important point when we observe that the Mapuche today are obliged to live both in the Mapuche world and in the Chilean world, and are internally torn in this contradiction. The helicopter in Sebastián's dream could be considered as a condensed symbol of this situation.
